

連載 27 迫り来る原発老朽化・・・脱原発が緊急の課題

2 回にわたって連載した浜岡 1 号原発事故は脱原発に踏み出すチャンスである。これを生かし、未来につなげなければ私達を待っているのはチェルノブイリの再来である。

ドイツでも水素爆発

昨年 11 月に浜岡 1 号で起こったのと同じ水素爆発による配管破断事故が 12 月、ドイツのブンスベッテル原発でも起こっていた。中部電力は、水素が溜まり易い場所を「余熱除去系配管の 1 箇所」だけと決めつけ、その手前部分にバルブをつけて水素を含む蒸気が入りこまないようにする、という対策をたて 9 月には運転を再開したい、としている。こうした対策をあざ笑かのように、ドイツでは別の場所で水素爆発が起こったのである。配管は直径 10 センチのステンレス製で、圧力容器頂部スプレイ系と呼ばれ、運転を止め燃料を交換する際、早く原子炉内を冷やすために、炉の天辺から冷やした蒸気を注入する。

浜岡とそっくりの事故が 1 ヶ月後にドイツでも起こっていたことは、蒸気が入りこむ配管にはこうした危険がいつも伴っており、日本の沸騰水型原発のすべてを総点検しなければならないことを示している。水素爆発はまた何処かで起こるかもしれない。2 度あることは 3 度ある、というではないか。水素爆発は沸騰水型原発の設計者が思いもつかなかった新型事故である。

圧力容器からの水漏れは「老朽化」の証拠

これに対し、同じ浜岡 1 号で 7 月に起こった圧力容器からの水漏れは「明らかに老朽化」によるものである。厚さ 15 センチの圧力容器の底部を貫通している制御棒駆動機構の鞘管の付け根に亀裂が入り炉水が 1 日当たり 80 リットル漏れていることに気づかず、7 月から 5 ヶ月間も運転していた。ちなみに、中部電力が昨年 8 月に定めた「保安規定に定める炉水漏洩量」、即ち原子炉を停止すべき水漏れ量は毎時 230 リットル（5520 リットル/日）である。この程度の水漏れは気にしない、ということであろうか。原発が如何に我々の常識とかけ離れた運転をしているかが分る。しかし、ことは生易しくない。圧力容器の亀裂は、配管と違って漏れをとめる緊急停止バルブなどが一切期待

出来ない。亀裂が一気に拡大すれば、手の打ちようがなく直ちに炉心溶融につながる。

あと 1 ミリで亀裂が圧力容器貫通・・・アメリカ

今月(3 月)19 日、アメリカの原子力規制委員会 NRC は、オハイオ州のデービスベッセ原発（加圧水型）の圧力容器頂部の制御棒駆動機構の鞘管付け根に長さ 18 センチの亀裂が入り、厚さ 15 センチの圧力容器が貫通するまであと 1 ミリしか残っていなかった、と発表した。反応を制御するために炉水に溶かしてあるホウ酸が原因の腐食らしい。NRC は国内の加圧水型原発すべての緊急点検を命じた。

迫り来る老朽化事故・・・脱原発が緊急の課題

浜岡 1 号は 1976 年の運転開始から 26 年になる。上記アメリカのデービスベッセ原発は 1978 年（同 24 年）、ドイツのブンスベッテル原発は 1977 年が運転開始（同 25 年）である。何れも寿命が約 30 年といわれる原発の寿命に後 1 歩であり、老朽化事故は今後増えると覚悟しなければならない。分厚い（15～20 センチ）の圧力容器に貫通する制御棒駆動機構や中性子測定器案内管などの溶接部分は、頑丈な圧力容器のアキレス腱である。中性子の照射をうけ劣化する圧力容器の溶接個所には時間が経てば経つほど応力腐食割れなどによる亀裂や破断の危険が大きくなる。

浜岡 1、2 号運転再開中止の裁判

東海地震を前に、浜岡 1 号と構造が同じ 2 号の運転停止を求める裁判がまもなく静岡で始まる。老朽化と設計ミスによる大事故を避けるためである。全国で 1000 名の原告を募集中。誰でも原告になれる。参加費用は年間 3000 円。問い合わせは、「とめよう裁判の会」（連絡先：T/F 054-653-2775）まで。

（河田）